



さくら並木だより

第2号

発行：相模原市
平成23年
4月

第2回検討会を開催いたしました。

被災された皆様に、心からお見舞いを申し上げます。震災などの影響で、このさくら並木だよりの発行が遅れましたことをお許してください。

昨年9月の市道相模原横山における倒木事故を契機に、市役所周辺の桜並木の維持管理の在り方について、学識経験者や市民の皆様からご意見を伺う検討会を設置し、このたび、第2回検討会を2月28日(月)に開催いたしました。今回は副会長の石川晶生玉川大学教授に、桜についてご講演いただき、その後、市道相模原横山に移動し、伐採断面の確認等をいたしました。

石川副会長による「桜」についてのご講演内容（抜粋）

日本人にとって、咲く桜の姿には特別な意味があります。桜は春の訪れを知らせてくれる使者の代表です。

桜は昔から人々の暮らしのなかで親しまれてきた花であり、日本を代表する花です。

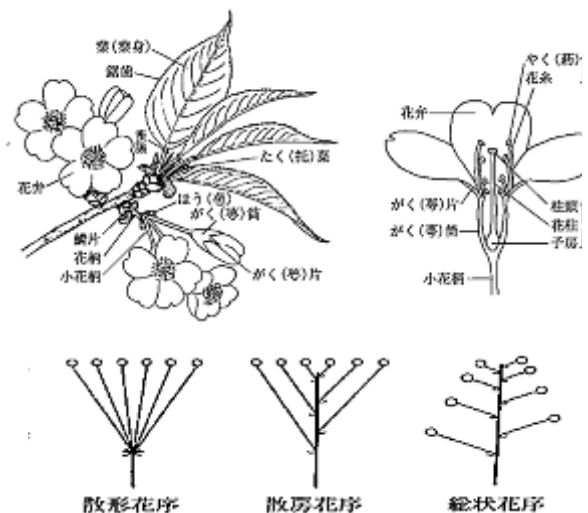
春が近づくとつれ、さまざまな桜が咲いていきます。早春から咲き始めるカンザクラ（寒桜）やカンヒザクラ（寒緋桜）、エドヒガン（江戸彼岸）、つづいてソメイヨシノ（染井吉野）、オオシマザクラ（大島桜）、ヤマザクラ（山桜）、さらに北上し北海道ではオオヤマザクラ（大山桜）が開花していきます。それぞれの地域には自慢の桜の名所があり、日本列島が春爛漫の色に染まっていきます。なかには冬や秋に咲くフユザクラ（冬桜）やジュウガツザクラ（十月桜）、フダンザクラ（不断桜）もあります。ギョイコウ（御衣黄）やウコン（鬱金）のように緑色や黄色の花を咲かせるものもあります。花の色も変化に富み、その種類は実に多いといえます。

サクラ類は落葉高木または低木で、ふつうは丸い樹冠を形成しますが、シダレザクラ（枝垂桜）のように枝が垂れ下がる樹形のものや、枝も花も真っすぐに上を向くアマノガワ（天の川）、また枝が横に広がる傘状のショウゲツ（松月）など、樹形もそれぞれに特徴があります。

しかしながら、桜の美しさはやはり春の大空に咲く花の美しさにあります。樹冠いっぱいに花を咲かせた姿が、周りの風景と相まって直接視覚に飛び込んできます。その全体から醸し出される姿には妖艶な魅力と迫力があがり、我々を春の真ただ中へと誘い込んでくれるのです。



検討会の様子

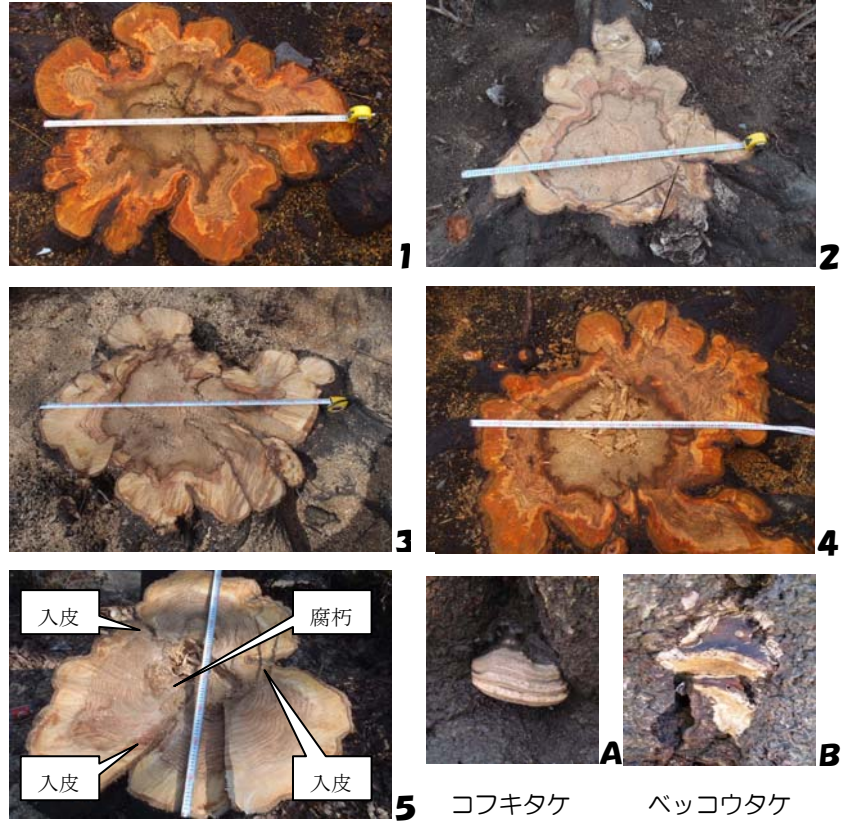


さくら百科・丸善・2010・石川晶生より

市道相模原横山へ移動し、
伐採断面を確認

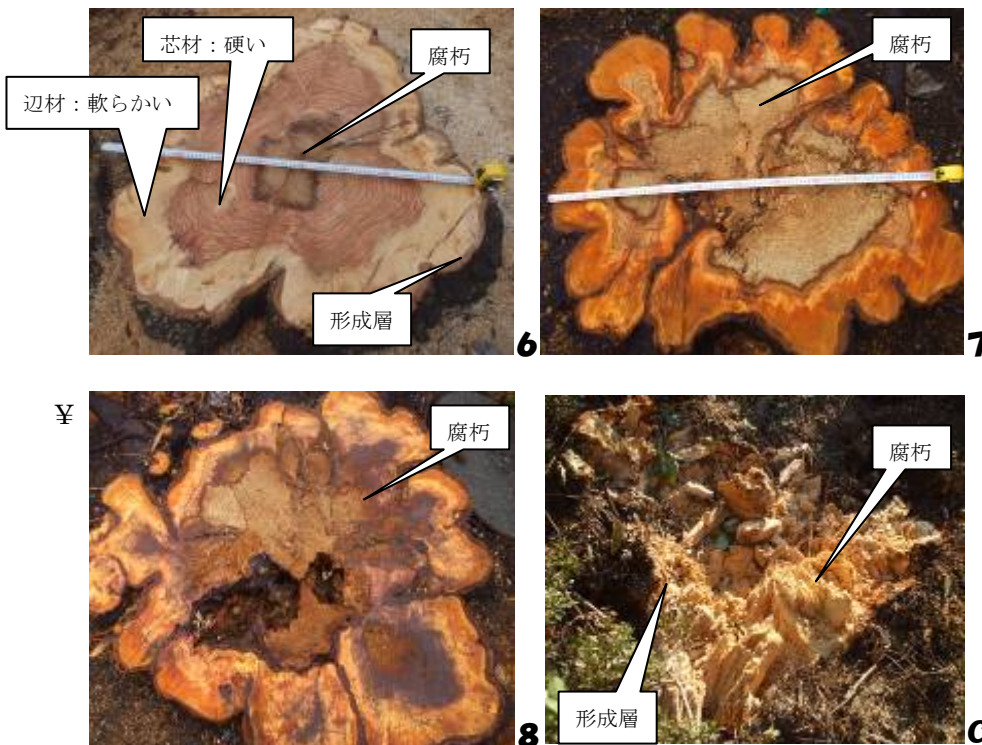
今回、伐採した8本の断面(写真1~8)を観察すると、どの木も真ん中がスポンジ状で軟らかく腐っていました。これを根株芯材腐朽病といい、原因は腐朽菌(写真A、Bなどのキノコ)によるものです。腐朽菌は樹皮の弱った部分や傷口から侵入していきます。

写真2, 3, 7, 8の4本については、相当腐朽が進んでおり、写真1, 4, 5の3本については、腐朽が進んでいるとともに「入皮」と呼ばれる裂け目も入っている状況でした。写真6については、新しい腐朽で、腐朽部は小さいものでした。



伐採断面の観察結果(腐朽の進行状況がわかりました)

樹体を支持する骨格である「芯材」に、傷口からまず腐朽菌が侵入します。次に中心の芯材部から外周の新しく軟らかな材である「辺材」に向かって腐朽が進行し、支持力が低下していきます。外側の樹皮のすぐ下にある樹体(材)を生産する形成層は、倒伏防止のため、急激に外側に肥大し根張りを広げ、樹体の支持力を補強していきます。腐朽は下から円錐状に進行するため、切断面よりも下の根株には、さらに腐朽が広がっています。



●写真6: 初期、「芯材」に腐朽菌が侵入し、腐朽が進行していきます。腐朽部は小さいが、攻撃性の高いベッコウタケに羅病しており、一気に腐朽が進む可能性があります。

●写真7: 中期、芯材のほとんどが腐朽し、かなり支持力が低下しています。急激に外側に肥大し、根張りを広げ、樹体の支持力を補強していることが観察されます。

●写真8: 後期、腐朽部の一部はすでに空洞化し、著しく支持力が低下しています。樹皮の下での生命線でもある形成層に腐朽菌は迫っており、末期的な状況に近いです。すでに倒木するレベルに達していると思われます。

●写真C: 末期、形成層の直前まで腐朽は進行し、健全部は見えない。これで自立していたとは思えない状態です。(倒木事故の樹木)